

配置された女性たち

『田舎教師』論

神田 知怜

はじめに

『田舎教師』（佐久良書房、一九〇九年一〇月）の新潮文庫版には、福田恆存の辛辣な「解説」が収録されている。そのなかに、次のような一節がある。

郁治やその恋人の兄の上級進学にたいする羨望もそれ（「浮かびあがりたい」気持ち…引用者注）です。また、郁治の恋にたいする嫉妬もそれだけのことで、女をとられた苦しさなどない。清三の恋というのも、じつはかれの文学とおなじで、やはり都会的な花やかな世界に浮かびあがるための通路でしかなく、女に対する真の愛着から

出ているではありません。あえていえば、女が師範学校生であることが、清三の「あこがれ」の大きな理由だったかもしれません。独歩のことばを借りていえば、「恋を恋する人」にすぎません。あえていえば、清三はただ浮かびあがりたい一心で、ほんとうに恋をする心の余裕も豊かさもないのです。花袋がそこに眼をつければ、『田舎教師』も当時の思想小説になりえたでしょう。^{〔一〕}

福田によると、清三の恋は「ほんとうの恋」ではない。郁治たち中流以上の青年と同じくらいに「浮かびあがりたい」気持ちの表れでしかないという。重要なのはその後の、花袋が清三の恋の質に着目できなかったことに対する批判

的な指摘である。福田は『田舎教師』全体を「たいくつな小説」で「稀薄な感じをまぬかれえぬ」と低く評価しているが、その理由は主人公清三の性格と文学者としての花袋の「本質」にあると述べている。つまり、そもそも清三の「浮かびあがりたい」気持ちもそれほど激しいものではなく、諦めも執着も苦しみも、清三の心に「大した傷痕を残さない」。それは花袋の「本質」が「せいぜい傍觀者的紀行作家」に過ぎないからと言うのだ。

たしかに『田舎教師』全体を通して見ると、美穂子への恋は「意外」なほど希薄に描かれている。というのも、読者はとても早い段階で清三の恋を知るからである。

郁治は躊躇しながら、「ぢや、Artはc。」

清三の胸は少しく躍った。「さうさね、機会が来れば何うなるかわからんけれど……今の処では、まだそんなことを考えて居ないね。」かう言ひかけて急にはしやいだ調子で、

「もし君がArtに行けば、……さうさな、僕は丁度小畑とMiss Nに対する関係のやうな考で、君とArtに

対するやうになると思うね。」

「ぢや僕は其方向に進むぞ。」

郁治は一步を進めた。

清三は今、俤の上で其時のことを思ひ出した。心臓の鼓動の尋常ではなかつたことをも思出した。そして其夜日記に、「かれ、幸多かれ、願はくば幸多かれ、オ、神よ、神よ、かの友の清きラヴ、美しき無邪氣なるラヴに願はくば幸多からしめよ、涙多き汝の手を以て願はくば幸多からしめよ、神よ、願ふ、親しき友の為に願ふ、」と書いて、机の上に打伏したことを思ひ出した。(二)

「四里の道」の途中での回想である。新しい生活を迎えようとする中で、中学校を思い出し、卒業式を思い出し、描いていた人生と実際の人生の違いに気づき始めたことを思い出し、変わっていく友人たちを思う。その文脈で現れるこの回想からは、清三が変化する環境の中で「Art」への恋を親友のために諦めようとするが、しかしまだ捨て切れていないのだということが読み取れる。この時の清三の恋は決して希薄なものではない。まだ主人公の人物像をつ

かみ切れていない一章で、読者は清三が「恋に悩む青年」であることを印象づけられるのである。

冒頭での人物像から考えると、美穂子への恋はたしかに希薄なものとも言える。しかし、清三は終始一貫して美穂子ひとりに恋していたわけではないことを考える必要があるのではないか。清三には美穂子以外の女性たちへの恋らしきものもあつて、美穂子をはじめとする多くの女性たちが清三の生に関わり、『田舎教師』を彩っているのである。郁治の妹雪子、小川屋のお種、通勤の道でたびたび見かける女教員、清三が入れ込む中田遊郭の静枝、優秀な教え子である田原ひで子。あるいは名もなき田舎の女たち。程度に差こそあれ、彼女らはみな清三とのロマンスを仄めかすような登場をした女性たちである。

山本歩は清三の〈歩み〉から「死の悲劇性」ではなく「生の可能性」を見出せると分析した論文で、彼女たちの現れ方について次のように述べている。

また、清三が歩くとき、名もない女性たちが多数その姿を現す。彼女たちはお種、雪子、遊郭の女、そして田

原ひで子らと同じように、ミクロには清三の女性への欲望を、マクロには、作品展開への期待を書き出す。あたかも、その登場の先にロマンスの発生があるかのような書きぶりで、語りはあらゆる女性に清三との発展の可能性を見出している。^{「2」}

そしてこのことから「ロマンスがあつたかもしれない」清三の「生の可能性」を見出せると続けている。

何も起こらない、淡い出来事。（中略）こうした場面を「影の薄い」ものと切り捨てるべきではない。この例からわかる通り、清三が歩くとき、まさに物語は語られ、その視野の中から、〈語り〉は物語展開の可能性、言い換えれば清三の生の充足の可能性を見出すのだ。^{「3」}

山本はこの「生の可能性」を清三に付加する語りを、花袋の心情に由来するものと結論づけている。たしかに、『田舎教師』は発表前から実在の人物の日記をモデルにして書くことを大々的に予告するなど、花袋自身が創作について

語ることが多かったために、書かれている内容や書き方を花袋の意図に繋げる読み方が多くなされてきた。そういった『田舎教師』の成立の背景を鑑みると、なぜ思わせぶりの語りを選択して書いているのかを、花袋の内面に求めるのは自然なこととも言えるだろう。

一方で、こうした女性たちや清三との関係そのものの分析は、ほとんどされてこなかったのが『田舎教師』研究の現状である。山本の分析でも、女性たちは「女性」であること以上の意味を見出されていない。つまり清三が美穂子に恋したこと、清三が「女教員」に興味を引かれたことが棚上げにされたままになっているのである。彼女たちのどのような個性が清三を惹きつけ、どのように清三の生に関わったのかは、はたして無視してよいものなのだろうか。

作品の発表から一〇〇年以上たったいままで、フォーカスされることのなかった『田舎教師』の女性たち。しかし彼女たちの存在は、確かに清三の生に関わり、「田舎教師」の人生を彩っているのである。本稿では、彼女たちが持つ個性をテキストから分析し、清三と女性たちの関係を考察したい。

一 女性たちの横顔

『田舎教師』の女性たちのなかで、清三と恋愛に発展する可能性を仄めかして登場した女性を改めて挙げると、次のようになるだろう。まずは、友人の妹で親友・郁治と三角関係になる女学生の美穂子、郁治の妹の雪子。また、新生活の初日に出会う小川屋の看板娘のお種、通勤の途の四辻でたびたび見かける女教員。加えて、散歩の最中にわざわざ見に行く賃機織りの娘、清三が入れ込んだ遊女の静枝。そして、優秀な教え子だった女学生の田原ひで子。様々な女性が清三に関わっていることがわかる。彼女たちが持つ特徴とは、どのようなものだろうか。彼女たちの何が清三の興味を引いたのだろうか。

まずは小説の冒頭から清三の恋の相手として登場し、話題にのぼる回数が多い美穂子から見てみたい。美穂子は中学の同級生である北川の妹で、いまは浦和の女子高等師範学校に通う女学生だ。容貌は、次の三つの場面から読み取ることができる。

其頃美穂子は赤いメリンスの帯を緊めて、髪をお下げに結つて、門の前で近所の友達と遊んだ。清三は其時分から美穂子の眼の美しいのを知つて居た。(十二)

浦和の学校にゐる美穂子の写真が机の抽出の奥に蔵つてあつた。(中略)美穂子は明るい眼と眉とを分明と見せて、愛嬌のある微笑を口元に湛へて居た。(十五)

美穂子は白緋を着て居た。帯は白茶と鶯茶の腹合せをして居た。顔は少し肥えて、頬のあたりがふつくりと肉附いた。髪は例の庇髪に結つて、白いリボンがよく似合つた。(中略)

二三日前までは老母(美穂子の母…引用者注)が夕毎に其処に出て、米かし桶の白い水を流すのが常であつたが、娘が帰つて来てからは、其の色白の顔がいつも分明と薄暮の空気に見えるやうになつた。(十七)

色白でふつくらとした、眼と眉が印象的な容貌をしているようである。野外での農作業などを必要とされずに育つ

たことや、裕福であることがにじみ出た容貌である。装いも、「髪は例の庇髪に結つて、白いリボンがよく似合つた」とあるように、当時の女学生らしいものだ。行田や熊谷よりも都会的な浦和の女学校に通っていることはもとより、容姿もまた都会的なのが美穂子の特徴と言える。^{〔4〕}

都会的な容姿の美穂子に対して、美穂子と対のように登場する郁治の妹・雪子はどのような女性だろうか。雪子は美穂子と違つて女学生ではなく、「今度は貴嬢も浦和にいらつしやるんでせう？」という清三の問いかけに「私など駄目」と笑つて答えたように進学の予定もない(十二)。行田という、相対的に都会にも田舎にもなり得る町に暮らす女性である。その雪子が初めて姿を現したのが、次の場面である。

父親が不成功で帰つて来たので、家庭の空気が何となく重々しく、親子三人黙つて夕食を食つて居ると、「御免なさい」といふ声を先に立て、建附の悪い大和障子を開けようとする人がある。(中略)

「まア、何うぞお懸け下さいまし、……おや雪さんも

御一緒に、……さア雪さん、此方にお入りなさいましよ」

と女同士は頻りに饒舌り立てる。郁治の妹の雪子は瘦削なすらりとした田舎にはめづらしい好い娘だが、湯上りの薄く化粧した白い顔を夕暮の暗くなり懸けた空気にくつきりと浮き出すやうに見せて、ぬれ手拭に石鹸箱を包んだのを持つて立つて居た。(五)

雪子の容姿を見ると、「田舎にはめづらしい」体形や白い肌を持つているなど、都会的な特徴を持つていることがわかる。美穂子だけでなく雪子もまた、都会的な要素を持った女性なのである。

あるいは、雪子も美穂子も都会的な要素が強調されて示されていると考えることもできるだろう。美穂子や雪子の容姿については地の文で語られている。『田舎教師』の地の文の特徴について、永井聖剛は以下のように論じている。

『田舎教師』の地の文は、(中略)物語世界内に身体を内在化している作中人物、すなわち林清三の知覚を素材にして成り立っているという特徴を持つ。その意味でま

さにこれは、花袋自身がかつて定義していた「観察したことに適当なる文字を当嵌め、その調子(中略)をその事件人物に従つて顕す方法」としての「描写」を実践しているわけであるが、そうであるのならば、この「知覚的発見・気付き」の遂行的な表出の線状的連なりとして紡ぎ出されるテキストは、物語世界内に客体的に存在する事物を再現しているというよりもむしろ、林清三のまなざしの軌跡をこそ対象化するだろう。そして、その林清三のまなざしの軌跡には、彼が属する世界への、^{〔5〕}彼の関与の姿勢が刻印されているはずである。

こう述べたうえで、「テキスト上に「見える」(あるいは感知される)ものとして表出されている風景を、作中人物の、心理状況や文化環境を反映した無意識裡の世界把握の「状態」と捉える姿勢を打ち出している。この地の文で「見える」ものが清三の「知覚的発見・気付き」であるという捉え方を、風景だけでなく人物に対する言及にも援用したい。^{〔6〕}つまり雪子や美穂子の容姿が「都会的に見える」のは、清三が彼女たちの容姿のうちの都会的な部分を特に見ている

からだと考えてみたい。そのとき、美穂子が「都会的な女性」のモデルとなっているとも考えられる。浦和という行田や熊谷よりも都会である町で女学生をしている美穂子は、清三にとって身近で最も都会的な女性だからだ。

清三が美穂子や雪子への好意について考えている場面を見ると、清三が彼女たちの何を見ているのかがよくわかる。

其笑顔を清三は帰路の闇の中に思ひ出した。相對して居たのは僅かの間であつた。其横顔を洋燈が照した。常に似ず美しいと思つた。ツンと澄したやうな処があるのをいつも不愉快に思つていたが、今宵はそれが却つて品があるかのやうに見えた。美穂子の顔が続いて眼前を通る。雪子の顔と美穂子の顔が重つて一つになる……田の畔に蛙の声がして、町の病院の二階の灯が窓から洩れた。(十二)

その日に会つた雪子の笑顔を思い出している場面である。美穂子と雪子の「顔」に意識が集中している。特に雪子に

ついては、取り澄ました性格は嫌つていても、容姿には惹かれるところがあるらしい。美穂子への好意の理由も、容貌が美しいということ以外に言及されていないことも注目に値する。清三は彼女たちの容姿の都会的なところを気に入っており、そのために都会的なところが彼女たちの特徴として語られていると考えられよう。

さらに、この「都会的な特徴を持った女性」という清三の好みに当てはまつた女性は、美穂子や雪子だけではない。先に挙げたお種や女教員たちからも清三は都会的な要素を見出している。

赴任した初日、村役場で一夜を過ごすことになったところで、清三は初めてお種を見る。お種は「色白の顔」を持つており、「眉の処に人に好かれるやうに艶な処」があつて、「豊かな肉づきが頬にも腕にも露はに見えた」とある(三)。色白でふつくらとしていると、美穂子や雪子にも共通する、都会的な容姿の特徴だ。

また、清三がたびたび見かけていたらしい女教員の容姿は、服装が印象的だ。「底髪に菫色の袴を穿いて、海老茶のメリンスの風呂敷をかゝへ」た恰好(十五)や、「白地の単

衣に白のリボン」をしている様子（十七）が見られている。底髪にリボンも、海老茶の色も、女学生らしいアイテムだ。すでに教員になっているものの、まだ女学生らしさが残った姿が清三の好みと合致している。

女教員と同様に名前もわからないが繰り返し見に行っている下村君にいる賃機織りの娘や、中田の清三気に入りの静枝もまた、清三の好みの顔を持っている。

下村君の村落に入らうとする処に、大和障子を半分明けてせつせと終日機を織つてゐる女がある。丸顔の、眼のぱつちりした、眉の切れの好い十八九の娘であつた。清三はわざ／＼廻り道してもいつも其処を通つた。（二十九）

右から二番目の女は静枝と呼ばれた。何方かと言へば小づくりで、色の白い、髪の方々した、此家でも売れる女であつた。眉と眉との遠いのが、何処となく美穂子を偲ばせるやうな処がある。（三十一）

丸顔や白い肌、目や眉に特徴があるところは、「都会的な女性」のモデルである美穂子の容貌と重なる。そして、最後に登場するひで子もまた、女学生であり、女学生らしい服装をしていて、都会的な容貌をした女性なのである。

「先生。」

とやさしい声でした。

障子を明けると、底髪に結つて、鳥渡見ぬ間に非常に大人びた女生徒の田原ひでが莞爾と笑つて立つて居た。昨年の卒業生で、出来の好いので評判であつたが、卒業するとすぐ、浦和の師範学校に行つた。（中略）丸顔の色の白い田舎にはめづらしいハイカラな子で、音楽が好きで、清三の教へた新体詩をオルガンに合せてよく歌つた。

（中略）

オルガンの音はやがて聞え出した。小使が行つて見ると、若い先生が指を動かして頻りに音を立てゝゐる傍に、海老茶の袴を着けたひで子は笑顔を含んで立つた。（四十

三）

清三が氣に入つて意識していた女性たちは、それぞれ個別に表現されており、そこから彼女たちの特徴を読み取ることができる。しかし、彼女たちの持つ特徴のなかでも、白い肌、丸い顔、印象的な目や眉、女学生らしさは、どの女性もそのいずれかを持っている、特別な特徴だった。出会う時期も、出会い方も様々な彼女たちだが、「都会的な要素を持つ」という点で共通した特徴を持っていたのである。そして、他にもあるであろう彼女らが持つ要素から、都会的なものの特徴として選んだのは清三である。清三の都会へのあこがれは、選択的なまなざしとなつて女性たちに注がれていたのである。^{「7」}

二 田舎教師の「都会」

清三は何人もの自分の好みに合った女性を見つけ出していた。女学生や、白い肌、ふつくらとした顔といった、都会的な特徴を持った女性たちである。ただ、彼女たちに共通するのは、都会的な要素を持っていることだけではない。彼女たちが現れるコンテキストを見ていくと、清三が注いでいたもう一つのまなざしが見えてくる。

浦和の寄宿舎で生活する美穂子が清三の目の前に現れることは、小説内では三度ほどしかない。一度は夏季休暇で美穂子が行田に帰つて来たとき（十七）、二度目は郁治と美穂子が交際し始めてすぐの夏季休暇にやはり美穂子が行田に帰つて来たとき、そして三度目も美穂子が行田に帰つて来たときである。たつた三度ではあるが、美穂子とは行田でしか会っていないのである。清三が浦和に会いに行ったり、美穂子が弥勒に会いに行ったりすることはない。清三にとつて美穂子は「普段は浦和にいて行田に来た時しか会わない女性」なのだ。そしてこの行田でしか会えないこと、もしくは美穂子が浦和にいることを強く意識していることが、自分好みの「都会的な要素」に注目していたことと同様に、地の文などに表れているのである。

郁治の胸にも清三の胸にも此際浦和の学校に居る美穂子のことが浮かんた。（十二）

「Art」の君は何うしたc. / 小畑が訊いた。 / 「浦和に居るよ。」（十三）

浦和の学校にゐる美穂子の写真が机の抽出の奥に藏つてあつた。(十五)

其時美穂子は、既に浦和の寄宿舎に歸つて居た。(十八)

今年卒業する筈の行田の美穂子の話も出た。(四十三)(傍線はすべて引用者)

「浦和」や「行田」という地名が、美穂子の名と一緒に挙げられている。「美穂子」だけで十分と思われるのに、地名も付しているのである。清三が美穂子のことを学校のあつた「浦和」か、実家があつて唯一会うことのある場所である「行田」と紐づけて認識していることがわかる。

そして、この女性と場所との紐づけは、他の女性に対しても同じように行われているのである。例えば静枝に会いに行くことは、「中田通い」と呼ばれ、中田に行くことと静枝に会うことはほとんど同一のこととみなされている。身請けされて静枝が中田を去る(三十六)と、清三が中田へ行

かなくなることからも、静枝と中田の紐づけの強さがわかる。

美穂子の場合ほど明確に地名と紐づけられているのは中田の静枝だけであるが、清三の好みに合つて、清三が何度か会つていた女性たちはみな、美穂子と同じで、ある決まつた場所ではか合つていない。雪子と清三は物語内現在で五回会つてゐるが、一度は清三の行田の実家、あとはすべて郁治の実家を訪ねて会つた時で、雪子とは行田でしか会つてゐないことがわかる。雪子は美穂子のように女学校へ行つてゐるわけでもなく、特に前半部分で清三が行田に歸つたときにはほとんど必ず雪子と会つてゐることからも、雪子と行田は切り離せないもののはずだ。

さらに、女学生らしい恰好をした女教員と清三が会つ場面から、特定の土地と女性との紐づけを読み取れる。

ある日、其女も同じ馬車に乗つて発戸河岸の角まで行つた。其女と謂ふのは、一月ほど前から、町の出外れの四辻でよく出逢つた女で、矢張小学校に勤める女教員らしかつた。底髪に菫色の袴を穿いて海老茶のメリンスの

風呂敷包をかゝへて居た。其四辻には庚申塚が立つて居た。此間郁治と一緒に弥勒に行く時にも例の如く其女に逢つた。(十五)

清三が羽生から弥勒へ向かう道の途中、発戸河岸のある北へ少し入ったところにある井泉小学校に女教員は勤めている。通勤路が途中まで清三と同じであるためにたびたび清三と遭遇しているが、後の場面からもわかるように遭遇するのはすべて同じ場所なのである。

久しく逢はなかつた発戸の小学校の女教員に例の庚申塚の角でまた二三度邂逅した。(十七)

「よく出逢つた」「例の如く」「二三度邂逅した」とあることからわかるように、女教員とは同じ庚申塚のある四辻で何度も遭遇しており、女教員はいつもこの四辻とともに登場しているのである。

また、お種は弥勒に赴任した初日に会っており、小川屋のある弥勒以外で登場することはない。質機織りの娘は、

娘が機織りする家の前を通るときに見るだけである。そしてひで子は清三が教えた高等小学校があり、再会した場所でもある弥勒でしか会わないため弥勒と結び付けられるか、あるいは通っている女学校のある浦和と結び付けられている。

『田舎教師』より二年前に花袋が発表した『少女病』『太陽』博文館、一九〇七・五)には、主人公・杉田古城が通勤の道で好みの少女を見つけて楽しんでる姿が描かれている。家から代々木の停留所あたりで見かける「栗梅の縮緬の羽織をぞろりと着た恰好の好い庇髪の女」、代々木駅から牛込でいつも同じ電車に乗る「肉附きの好い、頬の桃色の、輪廓の丸い、それは可愛い娘」。千駄ヶ谷駅からは三人の少女が乗ってくることがわかっていたり、信濃町の停留所では以前ここから「すばらしく美しい、華族の令嬢かと思はれるやうな少女」が乗ってきたことを思い出したりしている。四谷でいつも一緒になるお茶の水女子高等学校に通う美しい少女を見つけたときには心を躍らせている。杉田古城は、通勤の道々に「ここではあの少女」と気に入りの少女を見つけては、それを楽しみにしているのである。

そうやって少女を見られる空間である電車を「自分の極楽境」とまで考えているのだ。^{〔8〕}

清三が好みの女性と特定の場所を紐づけていることは、杉田古城のしていることと似通っている。杉田古城と同じように、清三もまた「行田では美穂子と雪子、弥勒ではお種、井泉の四辻では女教員」というふうには、それぞれの場所ですぐに好みの女性を見つけて歩いていたのである。

田舎の町や村に、都会的な特徴を持った女性たちを紐づけていくことの意味は何だろうか。これもやはり、清三の都会へのあこがれからくるものだとと言える。

清三は小説の後半から、次第に「東京へ」が弱まり、田舎を散歩するようになったり田舎で教員を続けることを決めたりする。一見すると田舎に生きることを受け入れたように見えるのだが、この頃に出会って清三が気に入っているのは賃機織りの娘や静枝、ひで子である。いずれも田舎育ちの女性には違いないが、当初の清三の好みと違わない、都会的な特徴を持っている女性たちだ。

一方で、たびたび清三をからかってくる田舎の女性たちは、ただひとくくりに「女たち」とされるだけで、清三は

相手にしていない。田舎で生きる自分の運命を享受するのも、女性の好みは相変わらず都会志向で、田舎的な女性には目もくれないのである。

結局清三は、都会的な女性たちを各地に見つけ出して配置することで、田舎に都会的な要素をちりばめていたのである。女性たちの存在を通して、彼なりの「都会」を、「極楽境」を田舎に作り上げようとしていたのである。

おわりに

『田舎教師』に登場し清三と関わりを持ちながら、スポットライトを浴びることがなかった女性たちのことと、清三の女性たちへの関わり方を見てきた。彼女たちはみな、女学生らしいことや顔がふつくらとしていること、白い肌や印象的な目や眉といった特徴を持っており、その特徴によつて「都会的な女性」とみなされて清三の興味を引いていた。しかしそれだけではなく、彼女たちは特定のコンテクストのなかに現れているという共通点も持っている。それは、彼女たちがある特定の場所以外で清三と会うことがなかったり、地の文によつてある土地との結びつきが強調

されていたりすることであり、彼女たちを特定の場所と紐づけすることで田舎に「都会」を見出そうとしていた清三のまなざしの表れであつた。佐久良書房から刊行された初版本の巻頭に付録されている、物語の舞台となつた利根川流域の地図と、女性たちが紐づけされている場所を照らし合わせると、清三の行動範囲のすべてに女性たちの現れる場所があることがわかる。

しかし清三の紐づけは、ほとんどが保たれずにほどこれていってしまう。例えば雪子は、美穂子と郁治が交際を始めて以来、郁治や母親から結婚を勧められるときに名前が出るのみで、会う機会が極端に減っていく。そして、しばらく雪子と会っていないまま、清三が亡くなる年の正月の日記のなかで「牧野雪子（雪子は昨年の暮前橋の判事と結婚せり）」（四十二）と、詳しい経緯もなく雪子の近況が書かれている。結婚相手が前橋の判事ならば、雪子も夫に付いて前橋へ移っていると考えられ、雪子と行田の紐づけは解かれてしまったことがわかる。以降雪子はほとんど登場しなくなる。

また、小川屋のお種は「此春、加須の荒物屋に嫁いで行

つた」（五十七）とあり、もう小川屋にはいない。中田の静枝は清三の知らぬ前に身請けさしてしまった（三十六）。清三が知る限り、静枝と親しかつた客は栗橋、古河、塚崎にいたので（三十四）、そのうちのどこかに移ってしまったのはずである。女性たちは次々に清三のもとを去り、土地と女性との紐づけがほどこれていってしまうのである。「田舎のなかの都会」という清三の「極楽境」は、物語が進むにつれて形を保てなくなっていくのである。

「極楽境」が崩れていくなかで、最後に出会つた女性であり、最後まで清三のもとを去らなかつたのがひで子である。ただしひで子に関しては清三は、自分から紐づけをほどこうとしていることがわかる。

ふと一昨日浦和のひで子から来た手紙を思ひ出して、考はそれに移る。羽生に移転してからの新家庭に、その明かな笑顔を得たならば、いかに幸福であらうと思つた。かれは此頃ひで子を自分の家庭にひきつけて考へることが多くなつた。（四十九）

浦和や弥勒の小学校とひで子を紐づけしていたのに、それをほどこいて羽生に移せないかと清三は考えていたのである。新しくひで子と羽生が紐づけされるかもしれないなかったが、ひで子との結婚は清三の死によって叶わなかった。それでもひで子は、小説の最後まで清三のもとに姿を見せている。

ある秋の日、和尚さんは、庇髪に結つて、矢絰の紬に海老茶の袴を穿いた女学生風の娘が、野菊や山菊などを一束にしたのを持つて、寺の庫裏に手桶を借りに来て、手づから前の水草の茂つた井戸で水を汲んで、林さんの墓の所在を聞いて、其前で人目も忘れて久しく泣いて居たといふことを上さんから聞いた。

「何処の娘だか。」

などとその時上さんが言つた。

処がそれから二年ほどして、其墓参をした娘が羽生の小学校の女教員をして居るといふ話を聞いた。

「あの娘は林さんが弥勒で教へた生徒だとサ、」と上さんは何処かで聞いて来て和尚さんに話した。(六十四)

結婚して羽生に迎えることはできなかったものの、ひで子は清三の死後羽生の小学校で働いている。ひで子と羽生を紐づけようという意図は、別の形で実現し、清三の「田舎の都会」はわずかながらも羽生の地で生き続けていったと言えるだろう。

〔注〕

1 福田恆存「解説」『田舎教師』一九五二・八、新潮文庫

2 山本歩「田山花袋『田舎教師』論——対等と懸隔のはざままで

——」『日本文藝學』第五〇号、二〇一四・三

3 前出「田山花袋『田舎教師』論——対等と懸隔のはざままで

——」(注2に同じ)。

4 ふつくらとした頬をした女学生は、田山花袋『少女病』『太陽』一九〇七・五、博文館)にも登場している。「少女病」を読む(石原千秋ほか、『文学』第一号三卷、一九九〇・七)によると、このような容姿の少女は杉田古城の個人的な好みであると同時に、当時の一般的な風潮であった。このことから、ふつくらとした頬は、女学生や都会らしい容貌だと言える。

5 永井聖剛「田舎教師の境界——林清三に見えるもの」(『文藝と批評』第八巻九号、一九九・五。引用内の引用は、田山花袋『美文作法』(一九〇六・一一、博文館)による。

6 永井は『自然主義のレトリック』(双文社出版、二〇〇八・二)で、田舎の女性が出される時に「赤い蹴出」が強調されていることについて、「田舎」の卑俗さを見出そうとする清三の差別的なまなざしを露呈するものと指摘している。

7 本稿では清三と複数回会ったことがある女性に限定したが、一度だけしか見えていない女性でも、都会的な要素を持っていると清三は興味を引かれている。

不図、其処に底髪を結つて、紫色の銘仙の矢絰を着て、白足袋を穿いた十六位の美しい色の白い娘が出て来た。

歸りに荻生さんに逢つて聞くと、

「あれは、君、和尚さんの姪だよ。夏休みに東京から来てるんだよ。何うも、田舎の土臭い中に育つた娘とは違ふねえ。何処かハイカラの処があるねえ。」

かう言つて笑つた。(二十九)

この時も清三はこの女性の女学生らしい都会的な見た目に興味を引かれて、わざわざ荻生に訊ねたと考えられる。

8 『田山花袋全集第一巻』(一九七三・九、文泉堂書店)

9 巻頭の地図には、熊谷から中田までが載っている。本稿では論じなかったが、熊谷には小学校の同級生の芸者・小滝がいる。

小滝の容姿は特に語られておらず、物語内現在に二人が会うこともない。また熊谷ではほかに都会的な女性を見つけていないが、熊谷は行田よりもにぎわつた都会的な町であるため、都会的な要素を持った女性を配置する必要がなかったと考えられる。

※本文の引用は『田山花袋全集第二巻』(一九七三・九、文泉堂書店)により、他の引用も適宜旧字を新字に改め、ルビを省略した。